



増改築を重ねてきた現在の大崎市民病院。

大崎市民病院が医療を提供する
県北エリアの人口は約三六万人。
「増改築を重ねて機能の充実と
施設整備を図ってきましたが、医
療が進歩し、能力の高い医師が集
まる中で、新しい設備を導入した
り、集中治療室や手術室を増やし
たくても、現在の建物では限界な
んです」と語るのは大崎市民病院建
設整備局病院建設部の笠原良治課
長補佐。高度な先進医療や災害医
療、救急医療を最大限に提供でき
る体制を整えるために、平成二十

市民の安心の 拠り所として

年に移転新築が決まった。
新築計画では救急医療体制をパ
ワーアップし、心臓血管外科と呼
吸器外科を新設。新型感染症に対
応する隔離型の発熱外来も設ける。
がん診療についてはPETなどの
先端設備を入れ、本格的な緩和ケ
ア病棟を設置。また、全国的に医
師不足が問題になっている小児医
療の強化を図る。さらに、県北の
周産期医療の集約化が図られると
ともに、新生児の集中治療室を整
備するなど、多くの内容が盛り込
まれ、地域完結型の医療体制の充
実を目指している。



建設課の職員が総合図をもとに医療現場の医師や看護師の意見を聞く。右から2人目は佐藤良紀主幹兼係長、3人目は三戸部武彦係長。

デザインビルド方式で 希望が適う体制ができました



大崎市民病院建設整備局
病院建設部 病院建設課 課長補佐
笠原良治

平成18年に1市6町の合併で生まれ
た大崎市の一大事業が市民病院の建設
です。市民の皆さんだけでなく、医療
スタッフや職員にとっても待望の病院
で、皆で日本一の自治体病院をつくり
あげたいと熱心に取り組んでいます。
今回は発注方式の点でも、工期の短
縮や工事費の縮減を目的に、われわれ
が経験したことのない設計施工一括の
デザインビルド方式にチャレンジする
ことになりました。実際にやってみると、
設計チームと施工チームが揃って

病院スタッフと時間をかけて話ができ
て、われわれの希望が反映されていま
す。さらに並木健二建設整備局長は現
役ドクターであり、院内ヒアリングと
建設サイドの意見をスムーズに調整さ
れるので、すばらしい組織体制だと私
は思っています。
古川穂波地区は新しい住宅地で、新
病院の敷地は小中学校と生涯学習セン
ターに隣接しています。完成すれば、
これから市の核の一つになっていくで
しょう。

災害時 緊急医療の要

大崎市民病院本院建設事業

大崎市民病院本院 建設事業

仙台から北へ約40kmに位置する大崎市の大崎市民病院本院は、宮城県の県北地域の基幹病院として、また平成9年以降は災害時の緊急医療に対応する災害拠点病院としても機能してきた。移転新築による病院建設事業が進行する中、実施設計の段階で、東日本大震災が発生。被災経験を設計・施工に反映しながら、平成26年、震災後被災地に初めて建ち上がる災害拠点病院となる。





作業所職員の総意として、市民病院職員が新病院にかけ
る意気に応じ、現場にも新たな看板を設置した。

震災後の経験を設計に活かす中
で、大崎市民病院本院建設事業は
国土交通省の「平成二十三年度住
宅・建築物省CO₂先導事業」と
して採択された。医療機能の充実
に加え、太陽光発電や照明の
LED化などによる省エネと、エ
ネルギー強化・地下水利用などに

省CO₂と 防災対策の融合

る過をすることにより飲用水にも
使えるようにしました」と久米設
計の小倉上席主査。施工と連動す
るきめ細かい設計対応が現在も続
けられている。



既存建物の被災状況調査書類。戸田建設では、震災
後ただちに顧客の被害状況を調査し、「建物診断報
告書」を作成した。(提供：戸田建設)

「医療活動をしている病院が直
面したのはライフラインの喪失で
した」と三戸部武彦病院建設課係
長。すぐに停電し、非常用発電機
が動き出したものの、燃料油はほ
かの用途にも使われており、残量
が少なかった。電力会社の優先対
応で翌日復電したが、停電が長引
けば大きな支障が出る恐れがあっ
た。断水も市の給水車で対応しな
がら翌日復旧したが、給水制限に
よりすぐに十分な水量を確保でき
ないとわかる。

災害拠点機能を 備えた病院



施工中の現場全景。免震装置の設置が進められている。

よる防災対策の融合が評価された。
古川穂波地区の建設現場では、
二〇〇トのクローラクレーンの
アームが空高く聳え、本館地下の
免震層が施工されている最中だ。
その下には震災後に設置が決まっ
たトイレなどの汚水排水を貯める
大容量の排水槽も施工済みである。
戸田建設の後藤浩作業所長は、全
員が安全作業を確認し合い、情報
共有を行う看板に、自作のスロー
ガン掲げた。「柔軟なアタマと
情熱に満ちたココロで、人の想い
をつなぐ病院づくりをしよう」。
現場はこれから最盛期に向かって、
最大五〇〇人体制で進んでいく。

「電気は受電系統を二回線に、
非常用発電機を複数化し、燃料の
備蓄容量を増やしました。地下水
は雑用水に利用する計画でしたが、

「医療活動をしている病院が直
面したのはライフラインの喪失で
した」と三戸部武彦病院建設課係
長。すぐに停電し、非常用発電機
が動き出したものの、燃料油はほ
かの用途にも使われており、残量
が少なかった。電力会社の優先対
応で翌日復電したが、停電が長引
けば大きな支障が出る恐れがあっ
た。断水も市の給水車で対応しな
がら翌日復旧したが、給水制限に
よりすぐに十分な水量を確保でき
ないとわかる。
ほかに被災して初めてわかつ
たことがいくつもあった。「当初
は厨房をオール電化で計画してい
たんですが、炊飯とオーブンをガ
スに変えました。厨房スタッフが
緊急の時は飯さえ炊ければなん
とかなる」と言ってくれたからで
す」。こうした被災経験を無駄に
したくないという強い思いから、
病院側と設計側が協力して医療現
場や施設スタッフに対するヒアリ
ングをあらためて行った。設計側
はその結果や震災後の情報収集を
実施設計に反映していった。

左は病院建設課の吉目木祐也技術主
査。右は佐々木昭係長。緊急車両が
東北自動車道から新病院にアクセス
する入出路の確保に取り組んだ。



経験を活かし、 自信を持って施工に臨みたい



戸田建設株式会社東北支店
大崎市民病院本院建設事業 作業所長
後藤 浩

わが社が「病院の戸田」と呼ばれる
中で、私も病院の施工実績がいつのま
にか多くなり、数えてみるとこれまで
に7件1724床になりました。その経
験では、われわれが工事を工程通り進
めるために努力するのは当たり前です
が、実はお客様にも大変な労力がか
かります。たくさんの機能で構成されて
いる病院では、一つの階を施工するに
は、その上の階の設備状況をお客様が
最終決定されていないと着手できませ
ん。大崎市民病院ではそれを理解して

くださり、心強い限りです。

仕事を受注したときに、病院の方々
が強いモチベーションを持って建設事
業に臨んでおられることを実感しまし
た。震災後はそのパワーがさらに強
くなっていることが、私の心に響きま
した。特に今回は設計施工一括で臨ま
せていただく初めてのケースです。そ
の中で自信を持てるような施工を行っ
て、お客様に喜んでいただけるように
したい。地域全体の病院にかけられる
想いを形にしていきたいと思っています。



新病院本館の完成予想図。地上9階、免震構造。病床数500床規模。大崎
市民病院が医療を提供する県北エリアの人口は約36万人。
(提供：大崎市)



「通常、病院の設計において
は、設計事務所として豊富な
公立病院の実績や経験を生か
した業務対応を心がけていま
すが、今回は更にJVとして施
工のノウハウや検討プロセス
を設計に反映させる事が可能
となり、高い効率と設計品質
の確保が実現できました」と
久米設計医療福祉設計部・小
倉基延上席主査は語る。